

矢崎美盛・中村研一著「絵画の見かた—画家と美学者の対話—」

岩波新書、岩波書店 1953年11月20日刊を読む

部分と全体

中村 (1) 畫家が繪を描いているのを見てごらん下さい。必らずどんな大家でも一步下って目を細くして全體を見る。いつも全體を全體として鑑賞する。その全體に部分が牴觸せぬように描いているのが、よい繪の一つの特徴である。畫家は遠いところに離れて見ていないと油繪は描けない。額縁の中の全體が一目で來るようにしなければならない。

(2) レムブラントの「夜番」(第14圖)というのは龐大な繪です。それを近くから見たならば技巧を盡くしたものです。レムブラント藝術の最高のものですが、ずっと離れたところから鑑賞するようになっている。兵士の六尺の鐵砲がぐうっと前につき出て、その足の下から女の顔がすこし見えている。それが全體としてずしんと來る。

(3) 同行したモリス アスランの妻君が見ていてぼろぼろ泣き出した。何か言おうとしたが、アスランも泣き出した。僕も泣き出し、三人泣き出してしまった。私たちが泣かしたのは悲しい情景だから泣かせるのも何でも無い。悲しいヒストリーだから泣かせるわけでもない。繪畫の全體がもつ力に感動し泣いているので、ああいうものが繪畫の極致でしょう。

(4) 僕はヴェラスケスの宮廷の家族の肖像「ラス メニャス」(第10圖)を見た場合、看守がいなかったならば、感動の餘りあそこを切り抜いて來ようかと何べん思ったかしのれない。マルガリータ姫のおつきの女の横顔があるのですが、牢屋に入れられてもよいからあれを切り取りたいような衝動を感じる。ああいうどえらい感動は、制作全體が與えるものです。

矢崎 なぜそういう大きな感動を與えるかということ、部分が全體とよく合致している。感動はもちろん總和が與えることであるけれども、部分が全體を支えている。全體がいい繪は部分もいいのです。

中村 (1) よい繪畫になると、部分が全體を裏切らぬようにできている。そのためには少しぐらい缺點を許さなければならぬところがある。

(2) よく經驗するのは、パリなどで、モデルの手なら手を毎日描いていると、一週間くらい描いて、どうしてもうまく行かぬという時期が來る。

(3) そのときには、美術館はありがたいもので、ルーヴルに行って、こんな部分の繪を、何千

枚かの中を探して歩く。マネを見るとそれをやっている。何だ、あの邊でやめているのか。こっちに行くとクールベがそれをやっている。何だあんなところで手を抜いている。こっちは一週間もやると、見るところは見えて知るところは知っておりますが、それをどれくらいでやめるかということ——これは全體のつながりの問題で、その邊の呼吸を教わることが度々あります。

(4)全體と部分のつながりはおもしろいものです。

矢崎 大體いうと、17世紀ごろから以後の繪は、全體が一つの單位になっている。

P33 ~ 34

[コメント]

図書館と同様、美術館にも定期的に通い芸術作品に親しむことは、人生を豊かにする。この岩波新書「繪画の見かた」は、真正面から「繪画の見かた」を論じたもので、折りに触れて何回も読むと、美術館訪問の促進剤となる。この「部分と全体」など、人生の生き方、仕事の仕方にまで通じる議論で趣き深い。

- 2009年8月17日林明夫記 -